

未来派と女性——アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正、理論と神話（一九〇九—一九二八）

報告 横田さやか

二十世紀初頭のヨーロッパに同時多発的に興きた歴史的アヴァンギャルドのなかでも、とりわけイタリア未来派（未来主義）は、男性優位主義的人間像を掲げた運動であり、それは「女性蔑視を賛美したい」（『未来派創立宣言』一九〇九）といった暴力的な言葉遣いに象徴されると解釈されうる。そうした炎上を狙う未来派のプロパガンダ的手法にばかり焦点が当てられ、現象としての未来派の多面性は見過ごされがちだ。その多様なアスペクトの一面として挙げられる、たとえば芸術実践において未来派という活動の場を得た女性アーティストたちの豊かな作品創作も、未来派にみられるジェンダー表象をめぐる問題系も、戦後の芸術批評の俎上に上がることはほとんどなく、今世紀に入り改めてこれらの論題へ関心が向けられたばかりである。本講演にお迎えしたローマ・ラ・サピエンツァ大学のチェチリア・ベツコ講師は、未来主義のという形容をつけた作品を執筆した女性作家のアンソロジーを編纂し（二〇〇七）、未来派の文学テクストにおけるジェンダー表象について詳細に論じた研究書を出版している（二〇一三）。未来派とは、はたして男性優位主義であったのか？ 女性たちの未来派文学には何が書かれたのか？ こうした問いを丹念な一次資料調査とテクスト読解を通して追究してきた第一人者である。

本講演では、未来派活動期（創立宣言が発表された一九〇九年から創立者マリネッティが死去する一九四四年までとされる）のうち、創立初期のテクストに的を絞り考察が進められた。まず、マリネッティによる女性描写が見られる複数のテクストを参照するにあたり、『未来主義者マファルカ』（一九一〇）に現れる女性像を明らかにすることで突破口とした。さらに、ヴァラントイーヌ・ドウ・サン・ポワンが記した、マリネッティへの返答となる『未来派女性宣言』（一九一二）、『未来派肉欲宣言』（一九一三）が対照項に挙げられた。小説『未来主義者マファルカ』は、マリネッティ着想によるキーテーマが散りばめられた実に興味深い物語だ。——アフリカの王マファルカが王子を産む。女性の関与なしに産んだその王子とは、夜も眠らず覚醒している翼を生やした不死身の超人である。——このように生命誕生に際し女性の存在が不要とされるうえに、マファルカが愛情と敬意を示す女性であるかれの母親は、既に墓に眠る存在である。しかしこの小説を引用して強調された重要な論点とは、だからといってこの作品をマリネッティの女性蔑視主義の証左と捉えることはできない点である。たとえば、マリネッティによるスキヤンダラスな指南書『いかにして女を誘惑するか』の出版を契機とした、雑誌『未来主義イタリア』上に展開

